

震災ボランティアピークの4分の1

細る支援の手

東日本大震災から七カ月が過ぎ、現地で活動するボランティアが減り続けている。九月には大学生の夏休みが終了、紀伊半島や名古屋市を襲った台風の影響も加わり、減少傾向に拍車がかかった。名古屋市のNPOは「避難所での被災者のケアなどまだまだ必要な活動がある」と、参加を呼び掛けている。(沢田千秋)

名古屋市の防災啓発活動に取り組み「レスキュー・ストックヤード」(R.S.Y.)は三月下旬から九月上旬まで、宮城県七ヶ浜町に三十三回にわたりボランティアを派遣してきた。一回に二十人程度を募集し、当初は四回分の約八十人が一晩で埋まるほど応募が殺到、順調

に続けてきた。九月に台風12号、15号の被害を受け、R.S.Y.は「の被害を受け、R.S.Y.は」と話す。同月半ばから三重県紀宝町に八回にわたってボランティアを派遣。十月に島の東北三県へのボランティアはピーク時の四分の一まで減った。岩手

でもらう。参加費を超え費用はうちが負担する。全国社会福祉協議会によると、岩手、宮城、福島の東北三県へのボランティアはピーク時の四分の一まで減った。岩手



宮城県七ヶ浜町で被災者(足湯)を提供するボランティア。5月、R.S.Y.提供

た一泊三日で参加費は一人一万五千円。R.S.Y.の担当者は「費用が足りないのでマイクはさらに減った」と話。二人には夜行バスで行った。R.S.Y.の担当者は「が

釜石社協予約制に変更

岩手県釜石市社会福祉協議会が運営する市災害支援ボランティアセンターでは、十月からボランティア受け付けを予約制に変えた。がれき撤去など大人数がある活動が減り、ミスマッチが生じ始めたからだ。予約制に変え、上限を一日五十人にした。センター職員は「土日など多数

現地でミスマッチ

来てくれる日に、仕事を紹介できないことも増えた」と背景を説明する。がれき撤去などに代わり、今いる仮設住宅から第一希望の仮設住宅に引越す手伝いや草刈りなど、二、三人で済む活動が増えたのが最近の特徴だ。平日の申し込みは、三十一、四十人の日が大半。(勝間田秀樹)

夏休み終了、台風…「まだ役割ある」

活動内容からみると平日も土日も一日五十人ほどが理想的な人数という。「人手がいる状態は変わっていない。「細く長く」をお願いしたい」と佐々木さん。十五日には、三千戸を超す市内の仮設住宅に、冬をしのぐ毛布を全戸配布する活動が急ぎよ入った。これだと「五十人ではとても足りない。悩ま

